【参加した生徒の感想文】

「高校生ボランティアに参加して」

県立奈良朱雀高等学校　２年　籔野　真歩

８月１７日午後４時頃に県庁前を出発して約１４時間、岩手県の一関に到着しました。それから男女に分かれ、約１時間、目的地の気仙沼市に到着しました。バスの中、私は不安で一杯でした。「ちゃんとボランティア活動が出来るのだろうか。役に立つことが出来るのだろうか。」と。到着してからも、この不安が消えることはありませんでした。地元の方の案内で市内を歩いた時、私は目の前の光景に言葉を失いました。海からはかなり距離があるはずなのに、１階部分に流れ込んだ瓦礫や家財道具。こんなに遠くまで津波が襲って来たのかと思うと、その場にいることがすごく怖くなってきました。さらに、海岸の方へ進んでいくと、２階部分しかない建物や、あったはずの建物が完全になくなり、コンクリートの土台だけが残っている光景が広がっていました。

山に囲まれた地域に住んでいる私にとって、海は広く美しいものであり、怖いという意識はこれまで全くありませんでした。けれども、街の光景を見て、心の底から「海が怖い。」と思いました。町を歩きながら写真を撮影していたのですが、だんだん心の整理が付かなくなってきて、途中からは写真を撮ることが出来なくなってしまいました。町からの帰り道、パンフレットを見ていると、そこには、被災する前の気仙沼の写真が地図と一緒に掲載されていました。ついさっき私が歩いた場所は、私が目の当たりにした気仙沼の風景ではなく、海沿いの静かできれいな街並みが続いていました。

私の中に、「いつか復興した気仙沼の街をもう一度訪れ、この目で見てみたい。」という想いが込み上げてきました。この日は、偶然にも私の誕生日でもあったので、より心に残る１日となりました。

翌日、気仙沼２日目は、地元の子どもたちとの交流会で、たくさん遊びました。本当に楽しく、時間が経つのを忘れてしまうほどでした。施設の方が茹でてくださった枝豆を、皆で食べようとしたその時でした。地面が大きく揺れました。地震はすぐには収まらず、２分くらいは揺れ続けていたように感じました。ほっとしたのもつかの間、急にサイレンが鳴り響き、街中に「津波注意報が発令された。」とのアナウンスが流れました。本当に怖くて怖くて、しばらくはこの恐怖心から抜け出すことができませんでした。

今年の３月１１日には、この地震とは比べ物にならないくらいの大きな地震がこの街を襲ったのかと思うと、頭の中が真っ白になってしまいました。

奈良には海がありません。津波が来ることはないのかもしれませんが、地震はいつどこで起こるのかわかりません。自分自身の防災意識を高めるために、日頃からの備えと、家族や学校、住んでいる地域の方々とのコミュニケーションが最も大切な事だと思いました。

今私ができる行動の一つとして、これからは、地域の防災訓練などに積極的に参加しようと思いました。

災害ボランティアを経験して

県立西の京高等学校　３年　川村　哲也

東日本大震災が発生したあの日、３月１１日１４時４６分、自分は、春休みの真最中でした。

パソコンの緊急地震速報が鳴ったので、テレビをつけてみると、報道特番に切り替わり、津波で海の近くの民家、車が流されている様子が映し出されていました。その後、しばらくしてテレビから聞こえてきたのは、「岩手県陸前高田市は、市民のほとんどの安否が不明」という衝撃的な言葉でした。SF映画を見ているかのような陸をさかのぼる津波の映像と安否不明という言葉。これが同じ国内で今起きていることなんだとは思えませんでした。

自分は、震災直後から、すぐに現地に行きボランティアがしたいと思いました。そこで、奈良県のボランティアバスに応募しようかと思いましたが、年齢の関係で無理だとわかり、あきらめていました。しかし、１学期の後半に今回の、奈良県高校生災害ボランティア隊の企画の存在を知り、迷うことなく参加しようと決めました。

そして、ついにその８月２１日がきました。

出発の２日前にも大きな余震があり、正直、行くことができるのか不安でした。また、はじめての車中泊で寝ることができるかどうかといった不安もありました。行きのバスでは、前後と、横にいた香芝高校と奈良高校の生徒と仲良くなることができて、ひとまず安心できました。

現地到着後、奈良との気温差に驚きました。

活動１日目、陸前高田市の災害ボランティアセンターへの道中、途中までは、奈良県の南部の山の方とそれほど変わりないなと思っていましたが、ある所を境に、車がひしゃげているのを見て、やっぱり、自分は今、被災地にいるんだなと実感しました。自分の見た被災地では、家よりも高く積まれたがれきの山、穴の開いた建物、地震が起きた日テレビのニュースで見た病院、スーパー。全てが非日常的な光景でした。

自分たちが主に活動した場所は、陸前高田市の米崎町というところです。そこでの活動は、溝に溜まったヘドロの泥かきでした。ヘドロの中から出てきた物は、本来なら家の中にあって、タンスの中に入っているはずの服などでした。また、がれき置き場にはパソコンなどが置いてありました。現地のボランティアセンターでは、活動中に見つかった物を“ガレキ”とは言わず、“思い出の品”と呼ぶようにと言われました。

２日目も陸前高田市、米崎町の同じ場所で活動しました。この日は、前日、雨が降ったこともあり、いろいろなものが流れてきていました。生徒手帳のカバー、「富士」と彫られたハンコ、そろばん、卒業アルバムを見つけることができました。作業は、３時前に終了しました。完璧な泥かきができなかったのは残念でしたが、少しでも水の通りが良くなったのでよかったです。

作業をしていると、自然に、それまで喋らなかった他校の人とも会話が生まれました。すると、その人とはどこかで自分の友達とつながりがあったりと、輪ができて、改めて、人のつながりを感じ、仲間の重要さを実感することができました。

奈良県に帰ってきてから思うのは、現地には２日しかいなかったけれど、その２日を一緒に過ごした仲間たちのと別れが寂しかったということや、行く前は長いと思っていた２日間が、実際過ぎてみるとすごく短かったということです。自宅に帰ってから、陸前高田市の震災前の様子が映った航空写真を見ると、奈良にもある洋服屋や、レンタルショップなどのお店や、スーパーなどが映っていました。自分が見たのは、そんな風景ではありませんでした。もともと人々の生活があったところに、今はがれきの山しかありませんでした。鉄道の鉄橋が途中で途切れていました。帰ってから、震災前の様子を見て涙が出そうになりました。現地にいた時は無我夢中だったので感じる余裕もなかったのですが、こうして思い返してみると何ともいえない独特の感覚があります。自分が今、このように普通に生活できている幸せ。特に変わったことをしなくてもこうして生きていることが、普通に幸せなんだということに気づかされました。

今回、この企画で被災地に行って活動できてとてもよかったです。また、被災された方に、活動させていただいたお礼を言いたいです。まだまだ復興には時間がかかるのかもしれませんが、今後も地元からできる支援とは何かということを考えて行動していきたいと思っています。

被災地復興支援活動ボランティア感想

県立高田高等学校　３年　藤田　国哲

今回この災害ボランティア隊に参加させていただいて、「今の自分の無力さ」と「今生きていることが当たり前ではないこと」を感じました。

被災現場に着いたときの初めの衝撃は、形が大きく変形した車が散乱し、鉄の塊が一面に広がっていたことでした。それは自分の目を疑うほどのものでした。そこで改めて「ああ、これほどまでにひどいものだったんだなぁ。」と感じました。自分が思っていた以上に見聞きしていた以上に、悲惨な現状がそこにはありました。元々家が建ち並び、人々が暮らしていた場所であり、多くの人びとが亡くなった場所でもある所に、自分が今立っていると思うと、ただただ被災された方々の無念を思い、追悼の想いがこみ上げてくるばかりでした。その大きな津波の傷跡を前に、私ができることは、その撒き散らされた瓦礫を一つひとつ拾うことだけでした。自分の背丈の何倍も高く積まれ、空との境目が普通の山の輪郭線のように見える「瓦礫の山」が静かに自分の無力さを物語っていました。

しかし、様々な光景は、悲しみを思わせるものだけではなく、これからの復興の兆しを思わせるものもありました。全国、また世界各地から送られてきた応援のメッセージ。
「応援しています」、「共に手をつなごう」、「PRAY　FOR　JAPAN」。被災地の人達が自ら鼓舞し掲げる言葉。「あきらめるな東日本　東北魂」、「がんばっぺし　陸前高田市」。そして感謝の言葉が書かれた大きな看板も。「多くの支援をありがとう」。全国の支援物資、募金、様々な場所からボランティア隊の派遣、何より現地の人々の笑顔とボランティアで活動する人々の笑顔に復興への希望を感じました。

このような震災はいつ私たちの身を襲っても可笑しくはありません。被災したのは東北ではなく、私たちの生活する周囲だったかもしれません。それは人知の及ぶところではありません。だからこそ、「今生きることを曖昧にしたくない」というのが私の実感です。今回のボランティアを通して、今まで私たちがあまりにも「生きている」ということに関して当たり前と思って、感謝できていなかったのではないかということに気付かされました。

何人もの人々が亡くなった場所に立って目をつむると、過去の多くの人々の笑顔と同時に、今なお悲しむ顔と必死に生きる人々の姿が目に浮かぶようでした。この震災は本当に悲しい出来事でしたが、亡くなった方の分もしっかり生きていきたいと心の底から思いました。また、何より、復興への一歩一歩を歩んでいくのはこれからの日本を担う今の若者、私たちなのであり、だからこそ未来への希望を胸に抱きながら、将来多くの人の為に仕事ができる人になっていこう！！と改めて決意しました。

「東北ボランティアを通して」

県立郡山高等学校　２年　長谷川　誠

去る８月１７日から２０日にかけて、３月１１日に起こった東北大震災に対するボランティアに行き、そこで五感を通して、様々なことを感じさせていただきました。

私はニュースなどを通して、被災地の情報を得ていましたが、日本のメディアというのは少しポイントをはずしたところをよく報道するので、実際、現地に行って、自分の捉え得るすべての感覚を通して感じることができたのはとても貴重でありがたい経験でした。

不運にも悪天候で少ししか活動をすることができませんでしたが、そのわずかな時間の中でも「被災地の実際」というものを感じることができました。中でもバスでの移動中に見た光景が目に焼き付いて離れませんでした。それは建物が津波によって流され、骨格しか残っていない状態でした。その場であの広島にある負の遺産である原爆ドームが想起させられ、とても恐ろしかったです。また津波の被害を受けたと思われる壊れた車が集められた場所があり、添乗していただいた現地の方がおっしゃっていた「津波が来たとき、高いところに逃げた人は助かった。」という言葉に呆然としました。そ

れは、裏を返せば、車で逃げた人は亡くなってしまった可能性が大きいということでもあり、このたくさんの車はそういう車なのだと思うと、言葉が出なくなりました。そしてこれからこの車をどう処理していくのかと考えたとき、被害とはその時、その場だけでなく、そのあともつきまとってくるものなのだと思いました。

そしてバスを降り、実際に被害を受けた場所の掃除をしました。そこには、震災前、普通に生活をしていただろうと思われるものがたくさん落ちていました。例えば靴や現金、衣服、また普通では考えられないものとしては、車や洗面台、床などがあり、地震の被害を生々しく感じさせられました。また臭いがするところや雑草などが生え、作業がしづらくなるところもありました。

私はほんの少しだけボランティアをさせていただきましたが、はっきり言って、これが復興の役に立ったとは全く思っていません。私の真のボランティアはここで経験させていただいたことをよりたくさんの人たちに伝えることです。奈良から東北まではかなり距離があり、直接現地に行って、復興の手伝いをすることは簡単なことではないので、すべての人が東北でボランティアというわけにはいきません。だから実際に現地に行かせていただいた者として、現地の状況を伝え、復興を望む私たちの思いと支援物資を送っていきたいと思います。

最後にこの地震により亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、東北が一日でも早く復興し、繁栄することを願っています。

東北ボランティアに参加して

県立二階堂高等学校　２年　金垣　美代

８月１７日から３泊４日の日程で、東北の気仙沼に行きました。

１日目は、津波の被害にあった町中を歩いて、現状を見ました。家は崩れていて、あったとしてもボロボロで、何が何だかわからずびっくりしました。少し場所が変わるだけで、被害の大きさもまったく違うし、そんな姿を見てすごくショックでした。地震と津波の威力に本当に驚きました。

次に、以前の町の姿を模型で再現する作業を私達と一緒にするために、地元の人達も集まって来てくれました。その中で、私は被害にあった人達の思いを知りたいと思ったので、注意して表情を見たり、話を聞いたりしました。その時感じたのは、テレビでは被災者の悲しくて暗い顔ばかり写しだされているけれど、決してそんなことばかりではないということです。本当は悲しいはずの人達が、そんな弱さを少しも見せずに、むしろ決して希望を失わず前を向いてみんなで町を復興させるんだという強い意志に、本当に驚かされました。

２日目は、海の近くで作業しました。津波で絡まった網をほどいて運び、振り分けるだけの簡単な作業のはずでした。しかし、真夏なのに怪我を防止するために長袖長ズボンを着て、その上雨が降っていたためレインコートまで着て作業していたので、予想以上に疲れました。

作業が終わって車に乗る準備をしている時、大きな地震がおこりました。しばらくしてサイレンが鳴り、私達は動揺しました。２回目のサイレンでは津波の危険を知らせて海岸には近づかないようにと言っていたけれど、海岸沿いを通らないと帰れないのです。私達は車の中でパニックをおこしてしまい、まだ体験したことのない津波にすごい恐怖を覚えました。とにかく高い所に登らないといけないので、車でひたすら山の上に登りました。しばらくそこにいて、津波が来ないことを祈りながら、ボランティアセンターに帰りました。その時気づいたのですが、地元の人達は案外冷静でした。冷静だということは、もう何回もこういう目にあっているということです。私達は１回警報が鳴っただけで驚いているのに。地元の人達のつらさが少しだけわかった気がしました。

私はボランティアに行って本当に良かったと思っています。怖い思いもしたけれど、それ以上に大切なことをたくさん学ぶことができました。このボランティアに実際に行って、画面で見る映像では

なく、ありのままの町を、ありのままの人達を自分の目で確かめられて良かったと思います。被災者のためにも、もっと復興が進んでほしいと願っています。今の私にできることは限られていますが、今できることをしっかりして、将来社会に役にたてるようになりたいです。

「ありがとう」が私たちを勇気づける

県立橿原高等学校　２年　浅井　維弥

私がなぜ被災地へ向かおうと思ったのか、私は今でもその問いに明確に答えることはできません。東日本大震災のボランティア活動をするために東北へ行くことに対するリスクについては、各種のマスメディアにより報じられていました。私自身もテレビのニュースなどで放射能汚染への偏見があることを、今年の京都五山の送り火の経緯などで知りました。またこの放射能汚染の問題については様々な考え方や議論があること、またボランティア活動の実際については未知数の問題も多く存在することを知りました。正直、私も放射能は見えないものなので少し心配をしていましたが、案ずるより産むがやすしと前向きに考え、一人でボランティアに参加することにしました。

震災から５カ月。現地では復興作業が進んでいるとは言え、気仙沼市や陸前高田市の海沿いでは、重機での作業が続いていました。私がボランティアに参加したのは８月２１日から２４日の間でしたが、それでもまだ沢山の人手が必要とのことでした。毎日休憩をはさみながらの５時間ほどの作業でしたが、瓦礫の片付けなどの力仕事をしていたので、帰りのバスでは皆疲れきっていました。しかし所々で見られる、「ご支援ありがとうございます！」「私たちも頑張っていけます！」などと書かれた立て看板を見て、さらに頑張ろうという気持ちになれました。こういった看板はいたるところで見られ、私たちボランティア活動に来た人たちを元気づけているように思えました。実際、私も福島原発のある福島県に住んでいる友人がいるのですが、ボランティアから帰ってきたことを伝えると、『おかえりなさい！そして、ありがとう！』と言ってくれました。私が活動に行ったのは福島県でなく、岩手県です。それなのに私に『ありがとう』と言った友人の心に私はとても感動しました。私が行った活動は全体で見れば、ほんのわずかです。しかしそんな私に『ありがとう』と言ってくれる人がいたことで、私は人の心の温かさに気づくことが出来、多くの勇気をもらうことができました。

「放射能で汚染されているから」と過敏になっている人は多くいると思います。また一方で、被災地で不便な暮らしを余儀なくされている方々がいます。日々何事もなく幸せに生活している私たちが、こんなに過敏になっていていいのでしょうか。むしろ、恵まれた環境にいる私たちが、困っている現地の方々を少しでも手助けできないものでしょうか。放射能汚染という見えないものを怖がって何もしないことは、私たちの心が恐怖に「汚染」されてしまっていることなのではないでしょうか。このような活動に再び参加する機会を待ちつつ、私は日々の生活に励みたいと考えています。私たちそれぞれのわずかな活動が、復興につながることを心に願いながら。

震災復興ボランティアに参加して

県立畝傍高等学校　２年　吉田　有岐

「震災はまだ終わっていない―」

私が現地に行ってまず感じたことである。

震災発生から５カ月。もうだいぶ復旧しているだろうと思いながら行った被災地。しかし、現地は違った。見渡す限りの荒野、瓦礫の山、廃墟と化した病院や学校、潰れた車の山。また、バスを降りて地面に立った時の虚無感。地面に目をやると、細かな木片やコンクリート片、釘の飛び出た家屋の柱などが無数に散らばっていた。

雨が降りしきる中での作業が始まった。私達の担当場所は、テレビなどでも映っていた高田病院の